

誕生の記憶をめぐる物語とケア

—われわれはどこから来たのか?—

坂井 祐円

仁愛大学人間学部

Narrative and Care over Memories of Birth : Where Did We Come From?

Yuen SAKAI

Faculty of Human Studies, Jin-Ai University

われわれはどこから来たのか? この問いかけは「魂」のあり方について示唆している。誕生の記憶についての物語は、この問いへの一つの指標になり得るのではないか。そして、ここには魂の癒しとしてのスピリチュアルケアを見出すことができるのではないか。こうした観点から、本稿では、誕生の記憶として分類される、出生時記憶、胎内記憶、中間生記憶の語りについて、それぞれ事例を挙げながら考察していく。まず一般的な自分の由来を探るという意味で、身体の起源について遡って考えてみる。その上で、果たして身体が〈私〉なのか、〈私〉の本質はいわゆる「魂」なのではないのかという観点に立って、その起源を追求する。手がかりになるのが、幼児期健忘によって覚えているはずがない誕生の記憶である。とりわけ身体を持たない純粋な「魂」のみの記憶である中間生記憶の語りからは、現代の神話とも言える魂の起源を考えることができ、私たちの生きる意味を見出すことにも通じることを明らかにする。

キーワード：誕生の記憶、胎内記憶、中間生記憶、自分の由来、スピリチュアルケア

1. はじめに

「われわれはどこから来たのか?われわれは何者か?われわれはどこへ行くのか?」(D'ou venons nous? Que sommes nous? Ou allons nous?)

これは、フランスのポスト印象派の画家ポール・ゴーギャン(1848-1903)が最晩年に描いた、絵画の題名である。この作品(制作年1897-1898,ボストン美術館所蔵)には、ゴーギャンの精神世界が見事に具象化されており、独自に様式化された神話の世界がキャンバス一杯に瑞々しく表現されている。しかも、作品の内容もさることながら、この題名が示す問いかけ自体が、研ぎ澄まされたスピリチュアルな感性を放っている。

「どこから来たのか」とは、生まれる前についての問いかけである。「何者か」とは、人間とは何か、人間はなぜ、何のために生きているのか、すなわち生きる意味についての問いかけである。そして、「どこへ行くのか」とは、死んだ後についての問いかけである。つまり、この絵画に込められた3つの問いかけは、「魂(spirit)」のあり方を示唆しているのである。さらに言うと、これら3つの問いかけは、それぞれが独立しているわけではなく、1つ目の問いかけが2つ目を生み、3つ目を生み出すというように、全体を通して流れるような一つの問いかけとなっている。

本稿では、ここで提起された問いかけを契機として、とりわけ「どこから来たのか」という問いかけに

焦点を当てつつ、これと深く関連すると考えられる「誕生の記憶」について、いくつかの事例に即して考察することを主題とする。この主題は、論考を進めていくうちに、随時「何者か」、「どこへ行くのか」という問いかけへとつながることになるだろう。

ところで、「誕生の記憶」というのは、狭義の意味で言えば、胎児が母体から出生した時の記憶のことを指している。これはあくまで胎児が経験した記憶である。胎児が成長し、言語能力が発達した段階になって、出生時をふり返ることで語られる記憶であり、記憶の分類からすれば、エピソード記憶に当たる。

そもそも出生した直後の胎児に、周囲の状況を理解したり、自分の行為や感覚を認知したりすることができるのか、ましてやエピソード記憶のような意識的な記憶を残すことなどできるのだろうか。

こうした疑問を余所に、「誕生の記憶」についての語りは、さらに出生時よりも前の記憶に及ぶことがある。つまりは、生まれる前の記憶である。彼らの語りの内容をもとに分類してみると、生まれる前の記憶にはおよそ次のような区分が想定できる。

胎内記憶：母親の胎内にいた時の記憶

中間生記憶：受胎する前の記憶で、現在の「生」と前の「生」の間にあたる期間の記憶

過去生記憶：現在の人生とは異なる、過去の人生の記憶
いわゆる前世記憶を含む

これらは、大門（2020）により、広い意味での胎内記憶に当たるとして分類されたものであるが、実際の語りの内容に沿ってみるならば、中間生記憶と過去生記憶の2つに関しては、胎内を超え出た記憶である。そこで本稿では、これら3つの生まれる前の記憶に、出生時記憶を加えた4つの記憶を総称して、「誕生の記憶」と呼ぶことにする。これらの記憶はみな、個人の誕生の由来に関わって語られているからである。

「誕生の記憶」についての語りは、常識的に判断するならば、作話や空想の類いにすぎず、学術的に取り上げる価値などないように見える。けれども実際に語られた内容を検証していくと、そうとも言い切れない側面がある（Tucker 2005）。

「誕生の記憶」は、「われわれはどこから来たのか」という問いへの一つの指標になりうるのではないか。しかも、それだけでなく、「誕生の記憶」を通して、「われわれは何者か」に相当する問い、すなわち人生の意味への問いにも応えることになるのではないか。そうであるとすると、この問題は「魂の癒し（Seelsorge）」としてのスピリチュアルケアの意義を担っていることになるだろう。本稿は、「誕生の記憶」をめぐる物語とケアについての思索と探究である。

2. 一般的な感覚から考える「どこから来たのか」

本論に入る前に、ひとまずは「われわれはどこから来たのか」という問いかけに対して、現代人の一般的な感覚ではどのような回答が得られるのか、考えてみようと思う。

多くの場合、自分の由来（ルーツ）を尋ねられたときには、個体発生の場面を想起するのではないだろうか。ヒトという生物種の個体発生は、精子と卵子の二つが結合し、受精卵が形成された時点で始まる。受精卵は細胞分裂していき、胞盤胚となり子宮に着床する。一人の人間の誕生を、この時期とするのか、それとも子宮内で胎児の体形まで成長した時点とするのか、あるいは母体から胎児が出生した時点とするのか、解釈はいくつかに分かれるとしても、生物としての身体を基準とすることは共通している。

この基準に照らしていけば、生物上の父親に当たる男性の精子と母親に当たる女性の卵子に、一人の人間（自分）の起源を見出すことになる。さらに考えていくと、父親にも母親にも、各々に父母（自分にとっては祖父母）がいるのであり、祖父母にもまた各々父母（自分にとっては曾祖父母）がいる、というように血縁をもった先祖へと遡及していくことになる。

これは生物学的に見れば、遺伝子（DNA）のつながりである。血縁というのは、遺伝子が次の世代に引き継がれることを意味する。ということは、その遺伝情報を逆にたどっていけば、私たちの生物学的なルーツを発見することができるわけである。このようにして見出したのが、現生人類の共通の女系祖先となる「ミトコンドリア・イヴ」である。これは16万年～20万年前のアフリカのどこかにいた一人の女性であ

ると推定されている。また、同じようにたどっていくと、人類共通の男系祖先とみなされる「Y染色体アダム」も見出される。この男性は16万年～30万年前のアフリカ東部に実在したと推定され、ミトコンドリア・イヴと概ね年代が一致している (Underhill et al. 2000)。

生物としての身体を基準として、「どこから来たのか」をたどっていくと、やがてはヒトという種を超えて霊長類の系統をたどり、さらには哺乳類、爬虫類、両生類、魚類へと、脊椎動物の系統進化の過程を遡っていくことになる。それは極限的には、生命そのものの根源に私たちのルーツを見出すことである (三木 1992)。

胎児の個体発生の過程では、母親の胎内に宿ってから30日を過ぎた頃になると、わずか10日ほどの間に、脊椎動物の系統進化の過程を再現することが知られている (三木 1983)。生物進化の歴史をたどって、私たちひとり一人の個体が生まれてくるという事実は、生命の神秘としか言うほかないわけであるが、このことは私たちの身体の中に、すでに私たちのルーツが刻み込まれているという意味を含んでいる。

さて、ここまでは一般的な感覚に沿って、生物としての身体に着目して「われわれはどこから来たのか」という問いかけを考えてきた。しかし、ここで一つの疑問が起こる。そもそも「自分」とは、“身体”のことなのだろうか。

人はみな、「私はほかならぬ〈私〉である」という感覚をもっている。どれほど世界の人口が増えようとも、〈私〉に代わる者はどこにもいない。たとえクローン技術によってまったく同じDNAをもった人間が現れたとしても、その人間は〈私〉ではない。〈私〉という感覚は唯一無二であり、〈私〉だけがそのことを知っている。私の身体は対象化することができる。また、私の抱いた感情や思考は抱いた後に対象化できる。対象化できるものは、もはや〈私〉ではない。〈私〉は世界を認識し把握する今この瞬間の主観そのものであって、対象化した途端に〈私〉ではなくなってしまう。

この〈私〉という感覚こそ、実感としての「自分」に相当すると言えるだろう。これは心理学において、「自我」とか「意識」と呼ばれる現象である。さらに

哲学では、〈私〉は最も実感を伴った作用であるにもかかわらず、脳内のどのような構造から生じるのか未知のままであるとして、この問題を「意識のハードプロブレム」と呼んでいる (Chalmers 1995)。また、この意識のもつ質感のことを「クオリア」と呼ぶ。

それでは、この〈私〉という自己意識は、いつ、どのようにして生まれたのだろうか。それこそ、〈私〉はどこから来たのだろうか。

現代の一般的な常識として、あるいは自然科学の主流の見方として、「意識は脳の機能である」という暗黙の了解がある。つまり、意識とは脳内の神経細胞(ニューロン)の神経伝達物質と電気化学反応の複合的な回路によって生み出される。「意識の統合情報理論」によると、意識とは脳内の情報系ネットワークの総体であり、その統覚作用であると捉えられている (大泉 2018)。また、この理論に基づいていくと、人口知能(AI)の中で人間の脳を再現すれば意識をもつこともできるようになるし、脳内をシュミレーションしたコンピューター・プログラムに意識をダウンロードすることも可能になる、と考えられている (渡辺 2017)。

しかし、このように捉えられる(脳のソフトデータと見做されるような)意識は、対象化され得る限り、意識の一部の内容を問題にしているにすぎないのであって、〈私〉の由来について解き明かしているとはいえないだろう。主観的な意識経験が物質としての脳からどのように生み出されるかは、なおもブラックボックスのままであり、そもそも脳内から生じたと言い切れるのかどうかさえ定かではない。

それならば、〈私〉という自己意識は、誕生のある時点において、肉体の外から来て肉体に宿ったのだとする考え方であっても、一つの可能性(仮説)としてはあり得るのではないだろうか。

要するに、この発想は前近代的な思考の象徴である「魂(spirit)」の存在を認めることを意味する。「魂」という言葉は、宗教学や文化人類学などの限られた人文系の学問領域で用いられることはあっても、自然科学の世界観には到底馴染まない用語である。しかし、本稿では「魂」という概念を、自己意識の由来を考えるための一つの有力な仮説としてあえて導入する試みをしてみたいと思う。「誕生の記憶」を、その語りの

ままに受け取るならば、そうした記憶を媒介するのは「魂」のような物質に依拠しない何らかの意識体であると考えたほうが、便宜上わかりやすいからである。ただし、「魂」とはいったい何なのかについては並行して考えていく必要があるように思う。

一方で、「魂」という概念を持ち込まなくとも「誕生の記憶」を説明することは可能ではないのかという疑問は、どうしても起こってくると思う。これは要するに、語りの信憑性の問題である。語り手がいくら真実だと主張しても、記憶の錯誤や後天的な偽記憶の可能性は捨てきれない。物的証拠の決め手がないのであるから、この検証は常に平行線をたどることになる。それゆえ、この問題はあくまで個人の判断にゆだねるほかないのであるが、ただし、ここであえて「魂」という概念に基づいて考察することは、常識的な世界観のゆらぎの契機としての意味も含んでいるのではないかと思うのである。

3. 「誕生の記憶」についての事例と考察

3-1. 三島由紀夫の出生時記憶

では、ここからは、「誕生の記憶」に関する具体的な事例を取り上げ、考察していくことにする。

最初は、出生時記憶についてである。これは、母胎から生まれ出てくる時、および出生の直後の記憶を指す。この記憶については、三島由紀夫(1925-1970)の自伝小説の冒頭部分に出てくる有名な述懐を取り上げてみたいと思う。

「永いあいだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあると言いつ張っていた。(…中略…) おそらくその場に居合わせた人が私に話して聞かせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだった。が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思われなかったところがあった。産湯を使われた盥のふちのところである。下ろしたての爽やかな木肌の盥で、内がわから見ていると、ふちのところにはほんのりと光がさしていた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできているようにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐めるかとみえてとどかなかった。しかしそのふちの下のところの水は、反射のためか、それともそこへも光がさし入っていたのか、なごやかに照り映えて、

小さな光る波同士がたえず鉢合わせをしているようにみえた。」(『仮面の告白』第1章、5頁)

三島は、1925(大正14)年1月14日の夜9時頃に、東京の四谷永住町(現在の新宿区四谷)の自宅にて出生した。彼は生まれた直後の記憶がはっきりと残っていると主張する。もちろんこの記憶のもつ光景は文学作品の中で描かれている以上、創作の可能性は捨てきれない。とはいえ、小説の記述の中では、伝聞でも空想でもないとした上で、「自分の目で見たとしか思われぬ」記憶であると訴えている。

この記憶が事実かどうかを科学的に検証することは不可能である。とはいえ、一般的に人生最初の記憶は3歳くらいで、それ以前の記憶を覚えているということはまずない。これは「幼児期健忘」と呼ばれる現象で、言語能力の習得以前は脳内の記憶の保持が未熟であるために、エピソード記憶として定着しない(記銘の失敗)と考えられている(Fivush & Schwarzmuller 1998・森2003)。ちなみに、乳児の記憶は生後2ヵ月で1日程度保持できるとされ、月齢が上がるにつれ長い期間覚えることができるようになるという研究成果(Rovee-Collier 1997)はあるものの、エピソード記憶には至らない。発達心理学の観点からすれば、出生時記憶はあり得ないことになる。

齋藤(2012)は、三島の出生時記憶の真偽について科学的証明を与えようなどとは考えていないとしながらも、三島の他の作品『金閣寺』に描かれるタイムトラベル的なイメージとの重なりについて指摘するとともに、人生記憶(生涯にわたって残る長期のエピソード記憶)と記憶リハビリの観点から、三島の出生時記憶のもつフィクション性を探っている。

一方で、真名井(1992)は、自身が記憶している出生前の胎内での記憶(と推察されるイメージ)を手掛かりとして、三島由紀夫という希代の天才作家が描く胎内的なバルド(中有)のイメージ世界に魅了されていった自身の青年期を振り返りつつ、独自の文学批評的な考察を進めることで、『仮面の告白』から『金閣寺』へ、そして最期の作品である『豊饒の海』へと連なる三島文学のモチーフの意味を深堀している。

ちなみに、「誕生の記憶」の事例を先取りするようであるが、真名井が語る自身の出生前の記憶(胎内記

憶) というのは、極めて幻想的であり、興味深いイメージ世界を伝えているので、ここで紹介しておく。

その記憶は、「私の意識が子宮内で目覚める」という感覚から始まる。そのときの「私の意識」は、肉体についての感覚がまだない状態で、〈意識そのもの〉という状態だった。そういう状態の「私の意識の眼(原文ママ)」に見えてきた現象があった。

「少し離れた前方に幕のようなものが垂れていて、それが頭部を押しあげるようにくぐってこちらへ近づいてくる影—ぼんやりとした人影があった。その人影はある程度まで近づくと、止まった。いつもほぼ同位置で止まり、しばらくあどさって幕の奥に消えるのだったが、その間終始前かがみで、上眼づかいに弱いやや悲しげな眼差しを私に投げかけているようだった。」(真名井 1992, 13 頁)

後述する幼児たちが語る胎内記憶の事例と比べてみるとわかることであるが、これは趣きがかなり異なっている。このぼんやりとした影法師は、上体だけが見え細部は闇に紛れて不明瞭であるが、「両腕を前に垂らしてその先に包みのようなものを掲げている感じだった」とも書かれている。真名井自身は、これを「肉体意識のなかった胎児の私の中にある、分離した肉体感覚が投影されたものであろう」と分析しているが、要するにこれは体外離脱の状態を示しているのではないだろうか。あるいは、意識が肉体に宿る前の状態で、胎児の体を眺めている様子を描写しているのだろうか。

「ある時、意識が眠りから覚めたときに、その幕をくぐって現れたりあどさって消えたりする影法師の奥のほうに眼をやると、灰色をした小豆粒の大きさの日輪のようなものが突如現われた。しかも、認識した途端この日輪は膨張して勢いを増し、灰色から白色へと輝きを放った球体となり、あまりに光が強すぎるために、思わず意識の眼を閉じてしまった。数瞬後に、再び意識を向けると、日輪は見えなくなっていて、そこにはまた影法師が現れていた。」(同, 15 ~ 16 頁)

真名井は、胎内にいたときのこの神秘的な経験を、18世紀の科学者にして神秘家であったスェデンボルグ(1688-1772)が記述する天界の主としての日輪と同じであるとし、物質界とは別次元の現象であったと

考察する。さらに、『チベットの死者の書』に描かれる、死んだ後に往く状態としてのバルド(中有)の描写を例にとりて、これは逆方向のバルドであって、肉体的ない天界から肉体をもつ物質界へと移行する中間状態の経験であったと解釈している。

三島の『金閣寺』には、有為子という美少女が暁色の光の中から人影として現れる、という場面が描かれているが、真名井はこの場面と自身の胎内での神秘体験とを重ね合わせている。とりわけ有為子という名前に注目し、有為とは仏教語で因縁によって生じる生死輪廻(サンサーラ)の現象(これは肉体に代表される)を指すことから、三島も同じく潜在的な出生前の記憶をもっており、この原風景が文学表現への昇華を促し、作家三島由紀夫を生み出したとする独特の解釈をする。また、ここから三島が割腹自殺を図る直前まで執筆していた遺作『豊饒の海』のモチーフである輪廻転生の世界観との関連をも示唆している。

実際には人工照明であったのかもしれないが、三島の出生時記憶においても、水面に照り映えてゆらゆらと揺れる黄金の光のモチーフが出てくる。これは天界の日輪のイメージに通じており、そうした超越的な光に包まれた中での現世の誕生の軌跡を描いているようにも感じられる。三島にとって、この記憶が事実であるかどうかなど本当はあまり意味がないのだろう。むしろこの出生時記憶というものが原動力となり、わが人生が開かれていくことのほうが重要なのである。

3-2. 発生学的事実と一致する胎内記憶

日本において、胎内記憶という言葉が独り歩きを始めたのは、2010年代になってからである。この流れを作ったのは、産婦人科医の池川明とその関係者のもとで制作された「かみさまのやくそく」というドキュメンタリー映画(荻久保 2013)の全国各地での上映会開催によるところが大きい。また、この映画制作の元となった胎内記憶に関する出版物は、ほとんどが池川によるものであり、その特徴としては、胎内記憶を語り出す子どもたちが「自分の親(とくに母親)を選んでくる」という発言に注目した点が挙げられる。その内容についての賛否は大きく分かれるものとしても、こうした「誕生の記憶」にまつわるスピリ

チュアルな社会現象を生み出したことの意義や影響についてはもっと考慮されてもよいだろう。

胎内記憶とは、狭義には、言葉を発することができるようになった2～5歳くらいの幼児によって語られた母親の胎内にいた時の記憶を指す。アメリカでは1980年代に、精神科医のトマス・バーニーラ(1981)や心理学者のデービッド・チェンバレン(1988)などが中心となって、出生前の胎内にいた時の記憶を探る研究が進められてきた。これは幼児の語り注目してこれを記述するという方法だけでなく、10代の被験者に催眠療法によって胎児期まで退行させ、胎内記憶を引き出すという方法も行っている。彼らの研究が中心となって、出生前・周産期心理学協会(Association for Pre- & Perinatal Psychology and Health; APPPAH)が創設されている。

日本では、池川による胎内記憶のブームが起こる以前から、妊婦のリラクゼーションの重視と出産前の教育の重要性を説く胎教との関わりの中で、胎内記憶が扱われていた(橋迫2021)。例えば、右脳教育研究家である七田眞は、胎教が優秀な知能を育み人格を決定づけると説くだけでなく、バーストラウマの問題にも言及し、これらは脳科学の成果によって裏付けられると主張する。また、胎児は母胎内にいる時から思考し感情をもち記憶しているとして、胎内記憶のあり方を支持している(七田2000)。

幼児たちが語る胎内記憶には、様々な内容が含まれているが、主には子宮内の羊水で、足を蹴ったり、ひっくり返ったりするなど、身体感覚に関するものが多い。実際に体で表現する幼児もいる。その中で、非常に稀有な内容と思われる事例として、池川が紹介する「精子の記憶」と題する男児による語りがある。

「生まれる前は、目に見えない玉みたいな形で、星のない宇宙みたいなところを、ぴよんぴよんはねて遊んでいた。そこから、いつのまにかイトミミズみたいなものになって、それがものすごくたくさんいて、肩とかにバシバシあたる。レースしているみたいに、泳いで走っている。それで、ぼくが一位になったみたいな感じ。そうしたら、たまごになった。そしてある日とつぜん、体がどんどん増えはじめた。一日一日すごいいきおいでふえていく。最初はめだかのような、ぶた

の赤ちゃんが丸まったみたいで、まぶたがやたらあつい。そのうち、まぶたがちょっとずつ大きくなるたびに、まぶたの皮が薄くなっていく。最初は真っ暗だけど、その後ちょっとずつ、目は開かなくても光のようなものが見えてくる」(池川2007, 74～75頁)

この記憶を語る男児は、3歳頃から語りはじめ、6歳頃にはイラストも描くようになったという。9歳時にマスコミの取材を受けたときには、細胞分裂する様子を「体が勝手に分かれていった」、手足ができてくる様子を「勝手に生えてくる」などと表現し、なおも記憶が顕在であることを示していた。

驚異的なのは、精子細胞の発生から始まり、系統進化の発生プロセスまでを、医学や生物学の知識など何ももっていないはずの子どもが詳細かつ正確に表現していることである。マスコミ取材での様子がYoutubeにアップされている(Shigeki Sv 2016)ので確認できるが、この子の語りが作話や空想では片付けられず、また大人たちから植え付けられた知識を受け売りで表現しているといった様子も見受けられない。

ここでとくに注目したいのは、この子の語りが発生の事実と符合すること以上に、その過程を観察している視点や体感している感覚についてである。

まず、この語りは基本的に、〈私〉を主語とし、〈私〉の体験として語られている。ところが、「目に見えない玉」とか「イトミミズみたいな」、「めだかのような」、「ぶたの赤ちゃんが丸まったみたい」といった形態の変化に関する表現は、対象化し外から眺める観察者の視点で語られており、〈私〉とは分離している。そこにまた、「肩とかにバシバシあたる」、「まぶたがやたらあつい」、「目は開かなくとも光のようなものが見えてくる」など、内からの身体感覚的な〈私〉の視点による体験過程が語られる。この二重の視点の動きは、通常の認識のあり方としての主観—客観の二分化とも異なる。私という意識が、その時々状況に応じて、自在に形態(体)の外からの認識になったり、内からの認識になったりする、といった動きなのである。

けれども、この後に出てくる、子宮内の様子について「色が赤紫のスライムのかたまりみたいな」こと、「ザーザーと何かが流れる音やドクドクの音が聞こえる」こと、体が大きくなって突然お腹が動き出すと、

「ふしぎのトンネルの中を肩がひっかかりながら押し出された」こと、「最後は自分の力で出ないといけない」などの表現（同、76頁）は、胎児としての身体が十分に形成されたことから生じる身体感覚が反映されており、主客二分の対象認識のもとで語られている。

身体の感覚器官が形成されていないにもかかわらず、精巣から精子ができる過程や受精卵が細胞分裂する過程を、いったい何が認識し記憶しているのだろうか。ここでは、〈私〉という何らかの意識体が、自身の発生の過程を認識し記憶する媒体となっていると考えるほかない。これは身体（物質）に依拠することのない意識体であり、「魂」ということになる。

胎内記憶についての幼児の語りの中には、母体内部の状態のみでは完結しない、子宮の中から外部の世界を見ていたといった発言も時々ある。空想でしかないように聞こえる場合もあるが、語られた出来事が母親や他の人物のもつ記憶と明確に一致することもある。ましてや「お空の上で母親の様子を見ていた」とか「そこで母親を選んでお腹の中に入った」などの発言に至っては、もはや胎内の記憶ではなく、胎内で身体が形成される以前の記憶ということであり、こうした語り事実であると仮定するならば、意識体としての「魂」だけで構成される世界の存在を認めざるを得ないことになる。「誕生の記憶」の 카테고리では、こうした世界を中間生と呼んでおり、そこでの記憶を中間生記憶と捉えている。

3-3. 胎内記憶ガール～お空のセカイのはなし

中間生記憶は、一つの生から別のもう一つの生へと移行するまでの中間の生（Life between Life / intermediate Life）の記憶という意味であり、生まれ変わりを前提にした言葉である。元々は、退行催眠によって過去の記憶が思い出されたときに、過去のその人生が終わりを迎え、死んだ後に往く世界として語られたものである（Whitton & Fisher 1986）。ここでは、「誕生の記憶」に関わる胎内に入る前の記憶の一つとして、中間生記憶という言葉を使い上り用いることにする。その語りは、必ずしも生まれ変わりを前提にしているわけではないので、正確には受胎前記憶というべきだろう。ただし、この記憶を語る際には、過去生記憶につ

いて語り出す者がいるのも事実である。

ここでは胎内に宿る前に過ごしていた「お空のセカイ」（中間生と推定される世界）での記憶について詳細に語る女兒の事例を取り上げてみたい。この事例は少女漫画家の竹内文香によって描かれた、事実に基づく漫画（竹内 2020）である。元ネタはインスタグラムに投稿していた漫画で、反響が良かったことから書籍化したものである。また、テレビ番組にも取り上げられ話題になった（アンビリーバボー 2021）。

その物語は、2歳4ヵ月になった頃の長女が、次女の妊娠を予見するところから始まる。「女の子が絶対に産まれる！」と何度も言い張っていたが、実際に赤ちゃんが女の子であることが判明する。出産を1ヵ月前に控えていたある日、母親が長女に胎内にいたときの記憶を尋ねると、「真っ暗でなんにも見えず、あったかいお水の中をプカプカ浮かんでいた」と語った。

長女の胎内記憶の語りは、他の事例に照らしてもそれほど珍しいものとは言えないが、その後次女が産まれてから、3歳3ヵ月になった頃、父親の「生まれる前はどこにいたの？」という質問をきっかけに、「お空の上」と答えた長女は、胎内に入る前の「お空の上」にいたときの記憶を語り出した。

お空の上のセカイには、赤ちゃんがいっぱいいて、その中には次女もいて一緒に過ごしていたという。そして、赤ちゃんたちを世話する「神さま」もまたいっぱいいて、いろいろな姿をしているという。自分を世話してくれていた神さまは、まぬけな顔だったと描写してみせた。

お空の上で、（今はお腹の中にいる）次女と一緒に、どのお父さんとお母さんにしようかを見ていて、次女からの提案で、今回のお父さんとお母さん（著者の竹内夫婦のこと）に決めたのだという。

そのうち、お空のセカイから母親のお腹に入るときには「超長いすべり台を高速で降りていく」という話になり、さすがに長女の話は創作かもしれないと疑い始めた矢先に、長女が「すべり台ののって次女のほうが自分よりも先に来ていたはずだ」と言いだし、しかも次女はお菓子を忘れたという理由からお空のセカイに戻ってきてしまったという話になって、夫婦の心のうちに揺れ動くものがあった。実は夫婦には、長女を

出産する少し前に、妊活の末にようやく授かった赤ちゃんを稽留流産した過去があったからである。

長女の言葉から、流産した赤ちゃんが次女なのだとすれば、永遠に亡くしたと思っていた命が、実は戻ってきてくれた命なのだと思うことができ、稽留流産への負い目から晴れることのなかった気持ちが深く癒されていった。

長女の語りは、生まれる前の中間生の世界の仕組みについても詳しく説明している。雲の上の「お空のセカイ」では、神さまとは別に世話係のお母さんやお父さんもいて、赤ちゃんを育ててくれる。赤ちゃんは、ひとりでごはんを食べれるようになったり歩けるようになったりすると、神さまから地上のお母さんのところに行く許可が出て、虹色のすべり台にのってお腹の中に入っていく。ちなみに赤ちゃんが自分で親を選んできるとのかについても聞いてみると、純粋に母親が優しそうだからという理由や、自分の決めた人生の計画に沿いそれに見合った親を選ぶ場合もあるが、中には自分で決められず、神さまに強制的にすべり台にのせられて、親を選べないこともあるとの話である。

それでは、お空のセカイの赤ちゃんたちはどこからやってくるのか長女に尋ねてみたところ、「お空のセカイの上に天国があって、そこから雨みたいに光の粒でたくさん降ってくるんだよ」と答えている。そして、ここから生まれ変わりの仕組みについても説明している。長女の説明によれば、生き物は死を迎えると、器であった体から魂が抜けて天国に向かう。天国では、他の魂たちと前の生での思い出話を共有し、新しい情報を得ていく。その魂は必ずしも人間であったとは限らない。天国では、次の生においてなりたいものや、やってみみたいことなどを決めると、魂のカラダが小さくなって光の粒になり、そこからお空のセカイに雨となってふりそそぐ。そして、光の粒はお空のセカイに着くと、赤ちゃんの姿へと成長するのだという。

さて、このような語りについて、たわいもない子どもの空想にすぎないと片付けることは簡単である。ストーリーの構成がしっかりしているように見えるのは、この漫画の著者である母親の竹内が無自覚に整合性を図って解釈した結果なのかもしれない。

中間生記憶は、語り手の意図からすれば、肉体を離

れた純粋に「魂」であったときの記憶ということになるため、当然ながら物的な証拠など何もないわけである。しかしながら、同じような記憶をもつ者がいるとすれば、そうした記憶が個人の作話や空想ではなく、何らかの客観性を帯びた事象に関する記憶である可能性を示唆していることにもなる。

次に示すのは、筆者が指導するゼミの学生が卒業論文の中で、生まれ変わりをテーマにしたインタビューを実施した際に、協力者となった男性の語りの内容をまとめたものである。(なお、この内容を本稿に記載することに関しては、卒論制作者の学生と協力者の男性に許可を得ている。)

インタビュー時、26歳であったこの男性は、中間生と思われる記憶について、幼稚園に入る前あたりから自発的に話し始めたらしく、大人になった現在でも覚えていると語る。その内容は、雲の上において、2足歩行で歩けるくらいの子供がたくさんいる。自分も同じく子どもの姿で、服は着ていなかった。雲の上にはたくさん白いすべり台があり、公園にあるようなひとりしか滑ることができないような幅で、先は見えないほど長く、どこにつながっているかはわからない。ほかの子どもたちが一目散にすべり台にのって滑っていく。彼は周りが滑っていくのを見て焦っていたが、そこに安心感を覚える案内人のようなおじいさんがいて、その人の一番近くにあったすべり台を滑ることになった。雲の上にいる案内人のおじいさんは、どっしりとした恰幅のある姿で、白いひげを生やしたサンタさんのような人で、そこにいた子どもたちとは異なり服を着ていた。親を選んで滑っていくというよりも、すべり台を選んで滑らないといけないという感覚があったという。

この男性の語る内容が、先に見た女兒の語る「お空のセカイ」での話と酷似していることは、一目瞭然であろう。異なる点があるとすれば、女兒が「神さま」と呼んでいた存在に近いものが、ここでは「案内人」と呼ばれていることであるが、役割的には同じようである。これがたとえ作り話であったとしても、この酷似性をどう考えればよいのだろうか。

さらに興味深いことに、この男性が子どもの頃から抱いていた命についてのイメージというものも語られ

ているが、これは女兒が説明する天国についての語り
とよく似ている。男性は、これは記憶ではなく、あく
までイメージだと断っているが、その内容は以下のよ
うである。

「命の本質は光の粒であり、その光の粒は地球に空
から降ってきて、体に宿って命が生まれる。また、大
きな光の粘土のような、地球よりも大きな塊が地球の
上に浮かんでいて、その一部が光の粒となって地球に
降りそそぐ。地球には命が宿るための体が準備されて
おり、そこに光の粒が入ることで、一つの命が始まる。
大きな光の粘土はスライムのような感じで、くっつい
たり離れたりできて、ふわふわしたりしている。光の
粒が地球で過ごす時間は、鍛錬を目的とするもので、
一生を終えるまでに、様々な経験をして、その経験が
光の粒を成長させる。一つの人生が終われば、光の粒
は体から出ていき、光の粘土である塊へと戻っていく、
という命のサイクルを繰り返す。」

こうしたイメージに関連して、この男性は前世と思
われる記憶もあると語っている。それは、イギリスで
靴磨きをしていたときの記憶で、チェックのシャツに
サスペンダーをしたような格好をしていて、スーツ姿
の紳士の靴を磨いているというシーンだけを覚えてい
るのだという。自分が靴磨きをしているというより、
第三者の視点から靴磨きをする様子を眺めているとい
った記憶であった。この記憶をもとに男性が考えたの
は、前世（もしくは過去生）というのは、個人単位の
記憶なのではなく、光の粘土のような塊に戻っていっ
たときに光の粒同士が融合して経験を共有するが、そ
の片鱗の一つがたまたま記憶として残ったものなので
はないか、ということだった。この過去生記憶に対す
る考え方は、大人になってから発想したものであると
しても、この考え方もまた、女兒の語る輪廻転生の説
明と近いものがある。

魂の本質が光もしくは光の粒であるという発想は、
現代のスピリチュアリズムの考え方の典型として見出
すことができる。たとえば、生まれ変わりの世界観を
日本に浸透させた『生きがいの創造』の著者である飯
田史彦は、2005年12月末に突然に意識障害に見舞
われ、生死をさまよって臨死体験をしたが、このとき
に光の世界に行き、そこで魂の記憶がよみがえると

もに、究極の光の存在たちと対話し、この世で生きる
ことの意味について様々なことを教わったという。光
の世界では、地球や宇宙のあらゆる存在とつながって
いる感覚になるとも述べている（飯田2006）。

また、スピリチュアリズムの源流の一つである『マ
イヤーズ通信』（原版は1932年に出版：Cummins
2012）には、グループ・ソウル（類魂）という考え
方が説かれているが、これによれば、魂は地上（物質界）
では個人としての経験を積むが、死後に霊界にいくと
1000以上の魂からなるグループに属しており、そこ
に還って行って生活することになり、地上での経験を
他の魂の様々な経験とともに共有しながら、グループ
として霊的成長へと向かうのだという。これは仏教が
説く自業自得の考え方に代表される徹底した個人主義
の輪廻転生観とは大きく異なっている。

もう一つ、アメリカの催眠療法士であるマイケル・
ニュートンが退行催眠を行ったケースの中に、魂の誕
生に関わる記憶についての発言がある。それは次のよ
うなものである。

「私の魂は巨大な雲のような塊から生まれました。
この青や黄や白に脈打つ強烈な光から、小さなエネ
ルギー微粒子として放り出されたのです。この脈動する
巨大な塊が、魂のエッセンスを嵐のように放出してい
ます。一部は再び戻って吸収されますが、私は外へ向
かって飛び続け、やがてほかの魂と一緒に流れに乗り
ました。次に覚えているのは明るい部屋で愛情深い存
在に見守られていたことです。」（Newton 2000, p.
125 / 澤西訳 2014, 125 頁）

この後に続く、シーナという女性の退行催眠のケ
ースでの対話（同, p.126-132 / 同訳, 126-132 頁）では、
強力なエネルギーと生命力が融合した光の集合体から
魂が生まれてくると語り、彼女はしかも、中間生にお
いて、魂の養育施設のようなところで新しく生まれた
魂たちを愛情深く迎える仕事をしていたという。それ
は魂の卵を孵化する助産師のような役割であり、また
見習い中であるが母親のような役割も担っていて、そ
こには同じ立場の者が5人いたとも語っている。

このように現代のスピリチュアリズムの考え方に
は、似たようなモチーフによって中間生の世界が描写
されている記述をいくつか見つけることができる。た

だし、ここで留意したいのは、こうした魂の誕生にまつわる世界観は、他の歴史的な宗教や神秘主義などの文献に見出すことができず、20世紀以降になって頻繁に出現していることである。同時に、中間生の世界や魂についての描写が、非常に具体的でかつ物語的であることも興味深い点である。

4. 「誕生の記憶」についての語りがケアになる

「誕生の記憶」についての語りは、その語り手自身のケアにもなっているが、同時にその語りを聞いた周囲の者たちにとってもケアになることがある。「お空のセカイ」について語った女兒の物語では、稽留流産を経験した夫婦にとっての悲しみや辛さなどを、忘れ物をしてお空に戻っただけで、再び同じ夫婦のところに生まれてきたという言葉によって、深く癒されたというエピソードがあった。竹内のインスタグラムが大きな反響を呼んだのも、実はこのエピソードに由来するところが大きい。流産を経験した多くの女性たちの共感を得て、彼女たちの癒しになったのである。

とはいえ、流産の経験を、死の向こうの世界に戻って再び自分のところにきてくれたという、いわゆる生まれ変わりをモチーフにした解釈が、必ずしも母親にとっての救いになるとは限らない場合もある。一つには、流産した胎児とその後に生まれた子どもを同一の魂をもつ存在だと決定づけることが、流産した胎児の固有性を否定することになるからである。

たとえば、人工妊娠中絶をした女性への心のケアでは、やむを得ない理由があったとはいえ、胎児を自分の意思で殺してしまったことへの罪悪感からくるトラウマや心理的動揺を抱えたまま、中絶した胎児への供養を続けるほかない状況が描かれている(菅生2022)。そうした中で、一つの折り合いとしては、「人間の力ではどうにもならないことがある」と一つの運命として受け止め、その状況を諦念として捉える見方もある。これらの事例に共通しているのは、亡くなった胎児をあくまで固有の存在として認知していることである。

あるいは、個人的な話であるが、筆者の妻も稽留流産を一度経験しており、その1年後に子どもを授かって無事に出産するに至った。筆者は、「後に生まれ

てきた子が、流産した子の生まれ変わりなのではないか」と伝えて妻を慰めたつもりでいたが、妻はこの見方に真っ向から反対し、「流産した子もその後に生まれてきた子どもどちらもわが子であり、流産した子であっても一つの人生を生き切ったのちであることには変わりはない」と強調した。この言葉に、かつて流産がわかって胎児の遺骸を子宮から取り出す手術をした際に、妻が「この子の存在は絶対に忘れちゃいけない」と涙ぐみながら話していたことを思い出した。筆者の伝えた生まれ変わりという慰め方には、流産した子の固有性を否定し、その事実と向き合うことを妻に回避させようとする意図があったことに気づかされた。実際、妻にとっては、流産した子がどこか遠くへ行ったわけではなく、「私の心の中でちゃんと生きている」という思いでいる。

結局のところ、流産や死産、あるいは中絶という形で亡くなった胎児と向き合い、その魂が「どこへ行くのか」という問いを母親がいだくことは、スピリチュアルな感性として自然に起こることなのであろう。

清水(2011)によれば、江戸時代の日本人の生命観では、胎児や乳幼児は「人」ではなく、神仏の世界を行き来している者であり、容易に帰ってってしまう存在であったという(この観念の背景には、当時の乳幼児の死亡率の高さが大きく影響しているとも言える)。また、流産や死産となった胎児は、神仏の世界に帰るだけでなく、いつかまた現世に再び戻って来るとも信じられていたという。そのため、成仏を願う供養は行われず(これは成仏してしまうと現世に戻ってこれなくなるという理由による)、いわゆる生まれ変わりの観念が生きていたのである。ただし、胎児の死に対してまったく何もしなかったわけではなく、神仏の世界での冥福を祈るための供養は行われていたようである。各地に残る地藏尊がこのことを物語っている。一方、現代における水子供養は、1970年代に成立したものであるが、その背景には医療技術の進歩から子宮内の胎児をエコーで見ることが可能となったために、胎児を「人」として扱うという考え方が普及したことが一つの要因である。水子供養は、母親の罪悪感やトラウマを癒すという効果を含みつつも、この営みは胎児の魂のゆくえ(すなわち「どこへ行くのか」)

に対する一つのあり方を示しているとも言えるだろう。水子に戒名をつけるというのも、江戸時代では見られなかった成仏を願う供養を行う意義からである。

水子供養を行ったり、中絶や流産した子どもの死を悼んだりする人々の大半は、具体的な死後の世界や実体的な魂をイメージしているわけではないだろう。けれども、誕生の記憶についてのリアリティを伴った物語は、こうしたイメージに実質的な根拠を与える意味を担っているように思われる。つまり、誕生の記憶についての語りがケアになり得るというのは、むしろ子どもが生まれてくること、そして子どもが死産してしまうことの意味づけを神話的に根拠づけることなのではないかと思うのである。

本稿の出発点は、私たちは「どこから来たのか」、「何者か」、そして「どこへ行くのか」というゴーギャンの絵画が示した問いかけであった。誕生の記憶という物語を通して魂の起源に深く思いを寄せることは、私たちが何のためにこの世界に生まれ死んでいくのかを考えることであり、生きることを意味を問うきっかけになることだろう。ゴーギャンがこの作品を自身の画業の集大成とみなして製作に全身全霊をかけたのも、22歳の若さで病死した愛娘アリーヌへの強い思慕と失意によるものだった。この大作は、右から左へと流れるストーリー仕立てとなっているが、左端に描かれる老女と白い鳥が死と復活を象徴するとともに、輪廻転生をモチーフとして娘の復活を願うものであることが見てとれる。完成後に自殺を試みたゴーギャンにとって、この作品は魂の叫びそのものであったのである。

終末期患者への緩和ケアの現場から始まったスピリチュアルケアの実際では、自身の死に逝く先がどうなるかがわからないために、これまで生きてきた人生の意味を喪失するという事態に陥るが、そこからどのように心の復活を成し遂げていくのかについて示唆している。多くの終末期患者は、死の向こう側に安らぎの世界が待っていると確信することによって、自己の存在意義を肯定することができ、死をありのまま受容していく、というケアのプロセスを経る。

同様に、人が誕生する場面であっても、生まれる前の世界が光に満ち、安らぎや愛情に満たされており、そこから自分の課題を達成するため、誰かを助け

るため、何か大切なことを気づかせるために生まれてくる、もしくは死産となる、と解釈することで、生まれてきた子どもの存在の意味、死産した子どもの存在の意味の理解が大きく転換してくるのではないだろうか。このように見るならば、誕生の記憶の語りもまた十分にスピリチュアルケアになり得るのである。

こうしたスピリチュアルケアのあり方は、近代を経て大きな救済の物語を失った現代人にとっては、新たな神話の創造と言えるのかもしれない。「どこから来たのか」「どこへ行くのか」という問いを科学的に追及したところで結局は徒労に終わるほかないわけであるが、けれども、この問いかけをひとえに神話的に受け止め神話素として追及することによって、何のために人は生まれてきて、そして死んでいかなければならないのか、その深い意味を安らぎのうちに見出すことができるのではないかと思うのである。

謝 辞

卒業論文の内容について公開することを快く許可してくれたゼミの学生Kさん、およびインタビュー協力者の方に、深く感謝いたします。

引用・参考文献

- アンビリーバボー (2021) 「赤ちゃんは世界を救う! アンビリーバボー SP」『奇跡体験! アンビリーバボー』 フジテレビ2021年4月22日放映
- Chalmers, D.J. (1995) Facing Up to the Problem of Consciousness. *Journal of Consciousness Studies* 2(3), pp.200-219
- Chamberlain, D. (1988) *Babies Remember Birth*, Jeremy P. Tarcher, Inc., Los Angeles. (『誕生を記憶する子どもたち』片山陽子訳・1991年・春秋社)
- Cummins, G (2012) *The Road to Immortality*, White Crow Books. (『永遠の大道』浅野和三郎訳・1985年・潮文社, 『不滅への道』梅原伸太郎訳・2000年・春秋社)
- Fivush, R. & Schwarzmüller, A. (1998) Children remember childhood: Implications for childhood amnesia. *Applied Cognitive Psychology*, 12, pp.455-473
- 橋迫瑞穂 (2021) 『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』集英社新書
- 飯田史彦 (2006) 『ツインソウル—死にゆく私が体験した奇跡』PHP研究所

池川明 (2007) 『子どもは親を選んで生まれてくる』日本教文社
 真名井拓美 (1992) 『胎児たちの密儀—作家の出生前記憶』審美社
 三木成夫 (1983) 『胎児の世界 人類の生命記憶』中央新書
 三木成夫 (1992) 『海・呼吸・古代形象—生命記憶と回想』うぶすな書院
 三島由紀夫 (1968) 『仮面の告白』(『新潮日本文学45 三島由紀夫集』5-112頁) 新潮社
 三島由紀夫 (1968) 『金閣寺』(『新潮日本文学45 三島由紀夫集』310-458頁) 新潮社
 森津多子 (2003) 「幼児期健忘と最初期記憶に関する研究の現在」『甲南女子大学研究紀要・人間科学編』39, 19-25
 Newton, M. (2000) *Destiny of Souls: New Case Studies of Life Between Lives*, Llewellyn Worldwide Ltd. (『死後の世界を知ると人生は深く癒される』澤西康史訳・2014年・パンローリング)
 荻久保則男 (監督) (2013) 「かみさまとのやくそく～胎内記憶を語る子どもたち」(ドキュメンタリー映画)
 大泉匡史 (2018) 「統合情報理論から考える人工知能の意識」『人口知能』33-4,460-467
 大門正幸 (2020) 『子どもが親を選ぶ』ってホントなの? 「胎内記憶」から親子の絆を考える』Next Publishing Authors Press
 Rovee-Collier, Carolyn (1997) Dissociations in infant memory: Rethinking the development of implicit and explicit memory. *Psychological Review*, 104(3), pp.467-498
 齋藤繁 (2012) 「三島由紀夫における最遠の記憶」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』第12号
 七田眞 (2000) 『驚異の胎教』エコー出版・新版(旧版は1998年)
 Shigeki Sv (2016) 「胎内記憶 2016/11/29」<https://www.youtube.com/watch?v=2djjyA0eKPw>
 清水邦彦 (2011) 「水子供養から見る日本人の生命観」『筑波大学倫理学原論研究会・倫理学』27, 45-57
 菅生聖子 (2022) 『人工妊娠中絶をめぐる心のケア—周産期喪失の臨床心理学的研究』大阪大学出版会
 竹内文香 (2020) 『おかあさん、お空のセカイのはなしをしてあげる! 胎内記憶ガールの日常』飛鳥新社
 Tucker, J. B. (2005) *Life Before Life: A Scientific Investigation of Children's Memories of Previous Lives*, St Martins Press. (『転生した子どもたち ヴァージニア大学40年の「前世」研究』笠原敏雄訳・2006年・日本教文社)
 Underhill, P.A. et al. (2000). Y chromosome sequence variation and the history of human populations. *Nature Genetics* 26, pp.358-361
 Verny, T. R.& Kelly, J.(1981) *The Secret Life of the Unborn Child*, c/o Barbara Lowenstein Literary Agent, New York. (『胎児は見ている』小林登訳・1987年・祥伝社)

渡辺正峰 (2017) 『脳の意識 機械の意識—脳神経科学の挑戦』中央公論新社

Whitton, J.L. & Fisher, J.(1986) *Life Between Life : Scientific Explorations into the Void Separating One Incarnation from the Next*, Grand Central Publishing (『輪廻転生 驚くべき現代の神話』片桐すみ子訳・1989年・人文書院)

SUMMARY

Where did we come from? This question suggests the nature of the spirit. A story about the memory of birth can be an indicator to answer this question. And here we can find spiritual care as a healing of the spirit. From this perspective, this paper discusses the narratives of birth memory, in utero memory, and intermediate life memory, each of which is classified as birth memory, with examples. First, in order to explore the origin of the general self, we will consider the origin of the body retrospectively. Then, from the viewpoint of whether the body is really "I" or not, and whether the essence of "I" is the so-called "spirit", I will pursue the origin of the body. The clue is the memory of birth, which cannot be remembered due to infantile amnesia. In particular, the narratives of intermediate life memories, which are memories only of pure "spirit" without bodies, allow us to consider the origin of the spirit, which can be called a modern myth, and to find the meaning of our lives.

Keywords: memories of birth , prenatal memory, intermediate life memory, roots of self, spiritual care